

定時制高校に影を落とす格差社会の実態

定時制高校といえば、昼間仕事に就き終業後に夜間に学校に来て学習する生徒のために作られた学校教育制度。

世の中が次第に豊かになるにつれ、最近では定時制高校には、中学校でのいじめ等での不登校や、問題を起こした生徒たちが増えて来ていることは、先に「『学校って何だろう?』の一つの答え（「雑学BN」のマスコミ等コメント関係（IV）、2007.08.14.：参照）」で触れたことがある。

だが、先日の「ドキュメントにつぼんの現場：定時制高校3年4組 3月」では、極最近では、格差社会が高校進学にも影を落とし始めた実態が取材されていた。

取材の定時制高校では、格差社会のしわ寄せの生徒たちが増え、定員の2倍の生徒が通って来ているとか。

「定時制入学者急増の背景にはどんな現実があるのか、卒業までの教室にカメラを据え、様々な事情を抱えながら懸命に道を切り開こうとする若者の生の声と姿」が取材されていた。

現実には厳しいようで、入学時から卒業時までには、1/3の生徒が退学していくとか。

父親の収入が不安定になり私学に行くお金の余裕がなく定時制に通う生徒、また、父親がリストラに合ったために学費が出せなくなりバイト代から月二万円ずつ家に入れていた生徒、専門学校への夢を抱きつつフリーターになるかも…と漏らす生徒、希望の会社を不合格となり戸惑い悩む生徒、等々。

だが、そうした中でも、自分で学費を貯め大学に合格し涙する生徒、何度も就職試験を受け内定通知を受けての笑顔、等々も。

「子どもは、社会の鏡」という言葉があるが、格差社会の影の部分がこうも定時制高校に如実に表れてきているとは……。

格差社会は我々大人社会の産物であるにも拘わらず、そのしわ寄せで苦悩する若者たちに、我々はこういった次世代を託そうとしてるのだろうか…。

「様々な事情を抱えながら、懸命に道を切り開こうとする若者」に、我々大人はどう応じればいいのか…。